外環道路の環境アセスメントについて

2005.3.18

栗林勝彦

今年一月のPI外環沿線会議で一年間の環境調査結果が報告されました。

また、二月の世田谷地域の意見交換会で、国は、参加した住民の環境影響に関する懸念に対して、看過し得ない回答をしています。たとえば、現況でも、調査の結果、東名JCT予定地周辺のNO₂は基準値を超えているのに、評価を待って対策を考えると、地域の自動車排気ガスの総量は増えるのではないかとの懸念に対し、渋滞が減少するから問題はないというような「あなたまかせ」の回答をしたり、換気所から吹き出す排気ガスは空に上がって拡散するから周辺の影響は軽微だと回答をしています。これらの回答は、国が環境問題に真剣に向き合っていない何よりの証左であると言えます。

とくに、「昨年とは異常気象であったので、調査結果に信頼性がないのでは」との住民の意見に対し、「むしろ幅広いデータが採れた」との回答には驚かされました。予想される外環の環境影響を過小評価するつもりだと思わされるものでした。

環境に関して、高い見識を持つことが重要です。

本年2月、京都議定書が発効しました。地球温暖化抑止のために、今後、国全体で温室効果ガス排出量に関する数値目標の達成のために取り組まなければなりません。地球環境問題を解決して持続可能な社会を実現するには、多様な側面からの対策が必要であり、とくに主要なCO₂排出源である自動車と道路のあり方については、細心の影響回避策が不可欠です。

CO₂(二酸化炭素)については、1750年以降31%増加していますが、とくに最近の増加率は急上昇しています。資料によれば、日本の場合、1999年の調査では、過去10年間で9%の増加だったとの報告があります。

地球全体の環境メカニズムを考える場合、ラブロックのガイア仮説が示唆に富んでいます。地球全体を一個の生命体と考え、地球上に生きる人間も含む生物と生存環境を、一つの健全な生態系と看做します。地球温暖化により、生態系のバランスが崩れます。正常な状態では、それぞれが自分勝手に生存競争をしているように見えて、生態系全体としては地球環境が生命が生存しやすいようにフィード・バックを及ぼしているのですが、CO₂やフロン等の物質が地球全体に拡がることから、地球全体のシステムが逆転現象になると考えます。

人間を含む生物と環境は、複雑に絡み合って互いに影響を及ぼしあっています。生物は周囲の環境と切り離せない関係を持っています。これを生態系と言いますが、この生態系を地球規模的に考えることが、地球環境を考える上で重要です。たとえば、地球上の化学物質が食物連鎖によって、より上位の生物に濃縮されるように、大気中の有害物質も樹木や人間に濃縮されます。環境の変化が生態系に悪影響を及ぼす良い例です。

大気中の有害物質は生物体に濃縮されるという事実を直視する必要があります。一例として、成城三丁目緑地(外環予定線際)には、CO2の過剰吸収により幹の中心が空洞化している樹木があるとの報告があります。

環境影響を侮らず、「もとを断つ」ための厳しい環境配慮が責務であるとの認識に立ち、以下の意見書を提出します。

外環道路の環境アセスメント（観測結果）についての意見書

成城地域フォーラム

代表 栗林勝彦

私たち「成城地域フォーラム」は、成城地域の周辺住民有志が集まり、平成12年に発足しました。私たちは、外環道路が世田谷区の「みどりの生命線」と呼ばれる国分寺崖線と野川の間計画が予定されていることから、環境への影響を危惧して検討を進めてまいりました。また、専門家や関係者を招いての学習会などを重ねて、折々関係機関に意見書や要望書を提出してまいりました。

今回、「環境の現地観測結果（四季）」が発表されたのを受けまして、私たちは、専門家とともに、その内容について集中的に討議検討を深めてきました。その結果、この観測結果と報告には多くの疑念があり、これをベースとして計画が進められることに不安をもち、意見書を提出することにいたしました。

1. 今回の環境の現地観測結果の位置づけについての疑問

①計画や工事が未定の段階で「環境アセスメント」として進めるのはおかしい

この環境の観測は、環境アセスメントの一環としてなされています。現在の時点で外環道路の計画は未定であり、何故この時期に単なる環境調査でなく、環境アセスメントとして実施するのか、その意図するところは既成事実の積み重ねとしか考えざるをえません。そのような姑息な方法は、住民の信頼を大きく損ねるものとして遺憾に思います。

また、外環道路の計画内容の詳細が未定のため、この環境観測は、その調査範囲や調査方法が何に判断根拠としてなされているのかが不明ですし、適切な評価を行うことは困難といえます。率直に言って、意味不明の無駄な環境観測としかいいようがありません。これも当初の位置づけが不明のところからアリ

パイづくりのような形で進められているところに起因していることから考えます。

②環境資源の宝庫である世田谷区間ではもっと緻密な調査を行ってほしい

現在のところ、外環道路は延長 16Km に及ぶ大深度による建設といわれています。これは、前代未聞の過密都市の真下を通る巨大な土木工事であり、その影響に対しては、緻密な事前の調査が不可欠といえます。特に、世田谷区間は、国分寺崖線や野川をはじめ、全体の計画区間の中でも多くの環境資源があることから、外環道路による環境への影響が危惧されています。

環境の観測やアセスメントは、そのような視点から重点的に取り組まれる必要があると考えます。貴重な環境資源が簡単に失われることがないように、最善の努力をすることが必要と考えます。従って、世田谷区間においては、環境調査にあたっては、調査箇所数や調査事項などを配慮して、環境保全という視点から重点的な取組みを行うことを要望いたします。特に、水源をもたない野川に関わる地下水や湧水について十分な調査を要望します。今回の観測結果をみると、データにバラつきが大きいものがありますので、適切な評価をするためにはデータ数を増やすことも必要です。

③去年は異常気象であり、あまり参考にならないのもう一年延長してほしい

昨年は、梅雨時には降雨量が少なく、夏は異常気象ともいえる高温が続き、秋には台風や大雨による降雨量の増大がありました。長年に渡り成城地域周辺で自然観測を続けているメンバーからの報告でも、落葉広葉樹林が越年したこと、成城みつ池が一時渇水したこと、動植物の生物相が変化したこと、降雨量の推移が極めて異常であったこと、など通常年とは違うことが指摘されています。

このような異常気象のもとでは、生物の種類や量、地下水や大気質など、通年と異なるあまり科学的とはいえないデータが散見されがちになり、有効な結果を得ることが困難です。今回の環境観測結果をみても、例えば成城みつ池の大腸菌数などの変化が大きすぎるなどの、異常数値が見受けられます。将来に禍根を残さないような客観的で科学的なデータにもとづく環境アセスメントを実施するためにも、さらに環境観測をもう一年延長することを要望いたします。

2. 「環境の現地観測結果（四季）概要版・平成 17 年 1 月」報告内容の疑問点

具体的な調査方法や調査結果に疑問を感じた主な点は以下の通りです。文中のページは、表題報告書のページを意味しています。

■大気質等の現地観測地点（1ページ）

この観測地点に、外環道路の建設目的である渋滞解消を考慮すると、渋滞予想地点ともいえる「環状8号線～仙川間」を入れていないのは疑問です。評価の方法がなくなる恐れがあります。また、この観測は換気塔の位置や影響の評価に関わると想定できるので、もう少し観測地点を増やさないと適切なデータとならないと考えます。

■観測結果二酸化窒素・浮遊粒子状物質の平均値（2～3ページ）

これらには、環境基準の数値が示されていません。環境基準が示されないと評価ができません。また、この観測結果からみると、東名J C付近と大泉J C付近の数値が酷似していることが気になります。さらに、調査日時からみて、観測結果には気象や温度や風向きが関係していると思われるので、説明資料として示すべきです。

■現地観測結果（気象等）（4ページ）

前記と同様に「環状8号線～仙川」間の観測が抜けています。

■現地観測結果（騒音等）（5ページ）

重要と思われる砧公園沿いや岡本付近が調査地点から抜けています。

■現地観測結果（騒音）（6ページ）

喜多見3丁目②の多摩堤通りの評価が〇〇とされているが、明らかに基準に達しておらず××の間違いであることと指摘します。また、既に環境基準を上回っている地点も多く、これらはどのように評価・判断するのかを示してほしいと考えます。

■現地観測結果（振動等）（7ページ）

大蔵5丁目の低周波や振動の数値が、大泉より高いのが気になります。ここでも環境基準が示されていないのはおかしいと思います。

■現地観測結果（地質）（8～9ページ）

非常に重要なデータとなるものにもかかわらず、観測地点が少なすぎます。J C付近、野川の北側、台地部など、深さ・広さ両方でのデータが不足していますので、追加すべきです。

■地下水調査（16～17ページ）

この調査は、生態系が移動していることや、微地形による影響などを勘案して、東名の南を含めて、もっと広範囲で行うべきです。また、16ページだけのデータから17ページの図面を書くことはできないと思います。多分、推測や既存資料にもとづいていると思われるが、その出典や実態とは異なる点を明らかにしておくべきです。さらに、等高線や矢印で示されている流れがどこまで確かなのかどうか疑問であり（説明できない場所もある）、今後の環境影響評価に関わる極めて重要な資料といえますので、正確なデータにもとづいたより緻密な資料としてほしいと要望します。17ページの図面ももう少し広い範囲で説明する必要があります。なお、16ページの表の②の次太夫堀公園のデータは、深層地下水の数値が浅層地下水の数値を上回っていますが、その理由を説明してほしいと要望します。

■野川流量調査（18 ページ）

野川に流れ込んでいる水量が把握されていないため、十分な実態把握とはいえません。

■現地観測結果（動植物等）（34～37 ページ）

この資料も、観測地点の範囲が狭すぎて生態系を理解するデータとして弱いと考えます。現在の動植物の生息実態からみて、「多摩川や砦公園」を入れた観測をすべきです。また、鳥のデータで「こげら」がのっていないなど不足している点も見られます。さらに、「注目される種」として絶滅危惧種などが示されていますが、普通種の中でも区部に見られないものがあつたり、普通種が生きていられる環境が重要ということも指摘できますので、より幅広く観測を行うべきです。なお、長年、市民による生物調査がなされていますので、平均値という意味でも重要な資料なので参考にしてほしいと思います。

■樹木の活力度（42～43 ページ）

あまり意味がない調査であると思います。ネクロシスなど追跡調査をしないと意味がありません。

■現地観測結果（人と自然の触れ合い活動の場）（52～56 ページ）

景観への影響は大きな問題であると考えられますが、この観測は箇所数も方法も視点も極めていい加減であるといわざるをえません。「散歩している人が見られました」などという記述は何の意味があるのか疑問です。例えば、富士山の眺望、国分寺崖線や野川た湧水などの眺望ポイント、外環道路予定地点及びジャンクション周辺での景観への圧迫感を評価できるような観測、地域景観資源のチェックなど、観測するねらいを明らかにしない調査はまったく意味をなさないと考えます。市民参加を求めた再調査を要望いたします。

3. 今後の対応についての要望

①環境の現地観測の再調査、追加調査を実施してほしい

今回の環境観測結果は、2 で示したように、調査範囲や調査方法について疑問点が多く、今後の環境アセスメントの基礎資料としても不十分であるといえます。また、昨年の異常気象による観測結果の妥当性にも疑問があります。そこで、この観測の再調査及び追加調査を要望いたします。

なお、これらの調査に、長年、市民が行ってきた生物調査結果等を参考にするように提案します。市民参加による調査は、事後のモニタリングも含めて重要なことと考えます。

②環境アセスメントの事前に環境の影響範囲や許容範囲の基準を示してほしい

今回の環境観測結果報告においても、既存の環境基準があるにもかかわらず、

その内容が示されていないものや、既存の環境基準を既に現状が上回っているものも見られます。定量的に示せる基準はその数値を、定性的なものについては評価のポイントを、事前に示さないと共通の土俵で検討する環境アセスメントにはなりません。事前に評価の基準を示した環境アセスメントを実施するように要望いたします。

③代替案をもつ環境アセスメントを実施してほしい

より開かれたP I方式の精神にもとづいた環境アセスメントを行うには、複数の代替案にもとづいて検討を進めることを要望いたします。外環道路をつくらない場合も含めて複数案による比較検討が可能となるような環境アセスメントを実施することを要望いたします。

④環境アセスメントの調査主体と審査主体が同じなのはおかしい

一般に民間事業者が行う環境アセスメントの場合は厳しい審査となり、計画変更が要求されることも多いことが指摘されています。しかし、国や都が事業主体の場合は、環境アセスメントの調査・審査主体と同じ機関となり、何らチェック機能が働かないこととなります。P I方式にふさわしい環境アセスメントの審査にあたっては、第三者機関や市民側による再評価や審査が必要だと考えます。

以上